文部科学省検定済教科書 高等学校公民科用 17 教出 倫理 003

倫理

自己を見つめて

監修／鷲田清一

教育出版

「悪魔の兵器」地雷

今も地雷が人を殺す

国際赤十字の推計によれば，現在でも世界約100以上の国や地域で，対人地雷によって毎年9,000人以上が死傷し，その多くは女性や子どもである。そして，国連によれば世界80の国や地域で，今なお7,000万個の地雷が放置されているという。

地球社会は，ベトナム戦争やアフガニスタンの内戦などを経験するなかで，対人地雷の非人道性にようやく気づき，1980年代に入り，地雷の無差別使用などを禁止する努力をはじめた。だが，その歩みは遅々として進まなかった。

破壊と新しい価値の創造

しかし1992年，アメリカやドイツの国際NGOがはじめた「地雷廃絶国際キャンペーン（ICBL）」（現在1,300団体が加盟）によって，地雷禁止運動は大きな飛躍をとげた。1995年，国連は「地雷撤去国際会議」をジュネーブで開いた。ICBLや難民を助ける会などは，1997年に「NGO東京地雷会議」を催し，国際世論を大きく動かした。

そして，ついに1997年12月には「対人地雷禁止条約」（オタワ条約）が調印された。この条約は，対人地雷の使用，移転・生産・貯蔵の禁止とその廃棄などをうたっている。2001年現在，日本を含め122か国が批准しているが，アメリカ，ロシア，中国などはまだ署名していない。

このようにわたしたち市民一人ひとりやNGO・NPOがもつ力は，地球社会が直面する問題を解決するうえで，重要な役割を果たすことができるのである。（←p.70）

①地雷を探知機で発見し，除去する作業員（1999年　ラオス）

②発掘された対人地雷（2000年　カンボジア）

③地雷によって右足を失った少年（2000年　カンボジア）

④地雷の多い地域では，こうした光景が多く見られる（2000年　カンボジア）

補充資料　第3節　人類と福祉

地雷に苦しむ子どもたち

カンボジア地雷撤去キャンペーン
代表　大谷賢二

同じ人間として，それも同じアジアに生まれ，どうしてこんなに生活が違うのだろうか……私は，カンボジアを訪れるたびに考えずにはおれません。カンボジアでは大都市部を除いては，電気もガスも水道もなく，熱帯雨林の厳しい環境の中で，農耕にたよった生活を強いられています。ベトナム戦争とそれに続く内戦で，橋や道路などのインフラは破壊され，経済は停滞し，人口の80%以上を占める農民は生活苦に喘いでいます。1993年9月には内戦が一応終結しましたが，「さあ今から仕事に励むぞ」というときに，今度は田畑が地雷原と化しているのです。国連やNGOの活動により，地雷原にはドクロマークがたてられ，危険地帯であることが分かるようになってきましたが，自分の農地が地雷原であっても，そこを耕すしか生きる道はありません。代わりの仕事はなく，国からの生活の補償がないため，地雷の危険を知りながらも，農地で作物をつくらなくては食べていくことができないのです。子どもも，学校へ行きたくても行けず，親の手伝いをして牛を追ったり，燃料の薪を拾ったり，ごみの山で働いたりしています。これまで何人もの手足を奪われた子どもたちに会ってきました。障害を負ったために，生活苦の中で親に捨てられる子もいます。親は自分ひとりで食べるのがやっとで，働けなくなった子まで養えないのです。

このように，地雷は二重三重の悲劇を生む「悪魔の兵器」なのです。私は，カンボジアの子どもたちが自分たちの力で豊かで安心した暮らしができるようになるまで同じ地球人として生涯をかけて支援し続けていきたいと思います。

（カンボジア地雷撤去キャンペーン E-mail c.m.c@nifty.com，HomePage http//homepage.1.nifty.com/cmc/）

●親の手伝い中に地雷で右足を奪われ，左足を大やけどしたコムリット君（11歳）。彼はこのあと，母親に捨てられ，孤児になっている。（教科書p.74の写真③と同じ人物）

●ウイン＝ノルンさん（43歳）は，2000年に地雷で右足を失ったが，生活のため，義足で農作業中だった2002年2月に再び地雷を踏んで左足も奪われた。